ぴっぴだより

No.7 2019.9.27

日に日に秋が深まりをみせている今日この頃。緑のどんぐりが落ちていることにいち早く気づいた柚葉ちゃん。翔々くん、遼くんは「見てー！」と袋いっぱいにどんぐりを集めて誇らしげです。「緑のまつぼっくりが落ちてる！」と茉子ちゃん。絃くんと翔々くんはきのこ図鑑をにらめっこ。「毒きのこだ」「そうだね」と真剣な眼差し。9月からぴっぴの仲間になった周くんは「かーちゃんにあげるんだ」ときのこを握りしめています。森での保育は変化に富んでいます。こちらが環境を意図的に設定しなくても、日々移り変わる季節や天候に合わせて植物や生き物たちが動き出す。毎日森にいる子どもたちは、その変化に敏感に気づき、関わり、深く理解していきます。

このぴっぴだよりの原稿を書くにあたり、4月から更に深くぴっぴと共に歩む生活を送ってきた日々を振り返る時間をいただきました。ある日、ゆったりとぴっぴの森の傍らに佇み、眺めてみる時間をとりました。茉子ちゃんと柚葉ちゃんは砂場で土を水で溶き、滑らかにしてチョコレートづくり。それを棒の先端に付け、砂場の木枠に並べて行きます。言葉は一言も交わさず没頭している。まるで長年仕事を共有してきたパティシエのように、暗黙の了解で協働しています。周くんは、「にしまちゃんおいで」と名前を呼んで誘い、二人でテーブルの下から顔を出し「いらっしゃいませ。何にしましょうか」とお店屋さん。そこへ秦空くんがやってくる。
円蔵くん、慈くん、大智くんは一冊の本を囲んで話しこんでいます。
制作コーナーでは、絃くん、蓮花ちゃん、真生ちゃん、咲知ちゃん、天音ちゃんが思い思いのものを夢中で作っている。各々が満足のものを作り上げ席を立っていくが、一人残り必死に何かを作る真生ちゃんの後ろ姿がありました。もう直ぐ一時間が経とうとする時、「ひとみー、できたー！」と駆け寄ってきた彼女の手には、紙を何枚にも重ね、テープで止めた一冊の本がありました。表には「ごはんのつくりかたのほん」というタイトルが、真生ちゃんの字で書かれていました。大作を仕上げ、満足な笑顔が輝いていました。
その日、大くりさんが飯盒炊飯をしていたので、そこから刺激を受けて完成した本だと思います。
ぴっぴの子どもたちは、なんて豊かに今この時を生きているのだろう。　この集中力、発想の豊かさ、人と関わる力。ぴっぴを安心できる自分の居場所にし、仲間と関わって遊びだし、自分の内面を満たすように遊びに没頭する。やはり、時間で区切られないたっぷりの遊びの時間は子どもにとって大事なもの。大切にしていきたいなと改めて実感しました。

この日のお昼は、大くりが炊いてくれた飯盒のごはんをいただきました。その美味しかったこと！おかわりが止まらない人が大勢。6回もおかわりした人がいたとか。よそってくれた大くりは大忙しでした。隣に座っていた夏樹くんは、「今日は忙しかったね」と満ち足りた優しい笑顔で語りかけてくれました。朝、「なっちゃんやらないよ」と言っていたのに。美味しくて、みんなが喜んでくれて嬉しかったね。

保育の世界は奥深く、まだまだ知りたいことが山程あります。私自身も日々を積み重ね、子どもたちが教えてくれる人間の本質を感じながら、目の前の子どもにとって何が大切か学び続けていけることを幸せに感じています。

猿谷 瞳